

2018年4月19日（木曜日）米国南部ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された米国内科学会（ACP：American College of Physicians）の年次総会に出席しました。

今回の学会出席の大きな目的は、Fellow就任の公式な式典であるconvocation ceremonyに出席することでした。出席できる機会は、Fellow昇格後3年以内とされており、2017年12月1日、ACP本部からinvitation mailが届いた後、準備に取り掛かりました。



私は在宅療養支援診療所を開業しております。学会出席で日本を留守にすることにより患者さんを初めとする関係者の方々に、迷惑がかからないよう配慮することが大きな課題でした。患者さん、訪問看護ステーション、居宅介護事業所など日頃関わっている方々には事前に学会出席で日本を留守にすること、連携医療機関にも、この期間中の電話相談、看取りを含む往診対応など代行をお願いして了解をいただきました。しかし、留守中の対応について、どうしても拭いきれない大きな不安を抱えながら日本を出発しました。訪問看護師さんからの報告メールは米国で確認し、随時返信しながら状況を把握しましたが、学会期間中、数年来訪問診療をしてきた患者さんのお看取りがあった、という痛恨のメールも届きました。このような中、なんとか学会出席を果たすことができました。

ニューオーリンズ訪問は今回で2度目です。初回は、1992年11月、アメリカ心臓協会（AHA：American Heart Association）年次総会での発表で、当時、留学先のジョージア州アトランタ（エモリー大学）から車を運転して、アラバマ州、ミシシッピ州を經由しやってきました。今回は、JALとアメリカンエアーを乗り継いで、成田発、ダラス経由でニューオーリンズに降り立ちました。ニューオーリンズ（ルイ・アームストロング）国際空港では、空港内でいきなりジャズ演奏が迎えてくれました。ホテルへはエアポートシャトルで片道40分ほどかかり、リタイアと思われる何組もの老夫婦と一緒にになりました。



ダウンタウンに向かう中、アメリカンフットボールチームのニューオーリンズ・セインツの本拠地であるスーパードームの脇を通りました。2005年のハリケーン・カトリーナで激しく損傷したものの、その一方では被害を受けた市民の仮設住宅にもなったようです。後に修復され、銀色に輝く威容は、深南部（deep south）の情緒豊かな街にあって、まるでUFOの様にひときわ目立っていました。

ホテル到着は昼過ぎ（日本では真夜中）。

チェックインし荷物をおいたあと、早速会場の確認に出かけました。Ernest N. Morial Convention Centerはミシシッピ川沿いに建つ巨大な建物で、Hall Aからconvocation ceremony が開かれるHall Jまで、端から端まで建物内だけで、およそ1キロ以上を歩くことになりました。会場からはRiverWalkというミシシッピ川沿いのアウトレットモールに繋がりゆったりと散策ができます。ちなみに各ホテルから出るシャトルバスは、直接Hall Jの前で降ろしてくれて便利なので、次回からはバスを利用することにしました。

Registrationに備えられた機械で自分の名札をプリントアウトし、プログラムと各種の広告などが入った手提げカバンをもらって帰りました。

いったんホテルへ戻り休んだものの、現地時間午後11時すぎ（日本時間早朝）になって、お腹が空きホテルのレストランへ出かけハンバーガーを食べました。



convocation ceremony当日（4月19日木曜日）

昼前に会場へ出かけ、事前にネットで申し込んでおいたレガリア（ガウン）とキャップを頂き、その場で実際に試着してみました。レガリアは重かったのですがその重みが、いよいよceremonyに出席するのだと実感に繋がり、また緊張感を覚えました。

その後、これもネットで予約しておいたポートレート写真の撮影を行いました。

定番の記念写真撮影場所として、ホールの外に設置してあるWall of Fameがあります。隣の端末に名前を入力し自分を検索すると、ボード上に Congratulations と表示され、記念写真を撮影できます。



ceremony会場の隣のホールにはchapterごとにFellowの集合場所がありました。米国各州に混じってアルファベット順に、Iowa、Japan、Kansasなどとchapterの場所が設けられており、ceremony開始30分前に集合しました。ACP Japan Chapter Governorの上野先生が、レガリアとキャップで正装され既におられました。ご挨拶を申し上げますと、上着につけるACP Fellowの襟章をくださいました。また、お隣のKansasには、杖をついたご老人が正装で座っており、当初ACPの偉い先生なのかと思いきや私と同様Fellowのようでした。ceremonyが始まってから、今回、new Fellowの最高齢は94歳であるとの発表があり、若い医師から高齢の医師まで、研究実績だけではなく、学会や地域社会への貢献、長年に渡る功績など、幅広く、隈なく光を当てて評価している称号なのだと実感しました。



Master (MACP) などの表彰が終わった後、全米および日本を含む世界各地のchapterが、ワイオミング州からアラバマ州までアルファベット順にカウントダウンのように紹介され、途中、テキサス州や、カリフォルニア州など大きな州の紹介ではFellowたちの盛大な歓声があがりました。

最後に American College of Physicians Pledge を読み上げる時がきました。convocation ceremonyのハイライトの一つです。ACPのExecutive Vice President and Chief Executive Officerを務める、Darilyn V. Moyer先生が壇上でこのPledgeを朗読しました。Fellow選出を正式に通知する私宛の書面にも、このMoyer先生の署名がありました。私はこのPledgeの文章を、大きな声で一緒に読み上げたいと以前から考えていました。中学校時代の英語の授業さながら、日本にいる時から音読の練習をしてきました。正面のスクリーンに映し出されたPledgeの英文を、私も大きな声で一緒に読み上げ、その後、キャップに付けたTasselを右から左へ回して、formal inductionが完了しました。ceremony終了後は、レガリアとキャップを返却しなければなりません。Tasselは記念品として持ち帰ることができます。大変良いおみやげになりました。



ceremony終了後は、Ernest N. Morial Convention CenterからバスでMarriottホテルへ移動し、国際レセプションに出席しました。ACP Presidentの冒頭の挨拶のあと、気さくな交流が始まりました。先程まで厳格な式典に出てきた人たちですが、場所と雰囲気ガラリと変わり、ここでは皆が開放されたようです。生バンドの演奏に乗って、皆、思い思いに中央ステージに出て陽気にダンスを始めました。

時計を見ると、午後9時半を回っておりました。

明日（4月20日金曜日）の夕方にはJapan Chapter主催のレセプションが開かれますが、私はクリニックの仕事に戻るため、朝の飛行機で帰国の途につく予定でした。予め上野先生ほか、Japan Chapterの先生方にもお伝えし、お詫びして会場をあとにしました。ホテルに戻って早速、帰国のため荷物の準備に取り掛かりました。翌朝、ダラス フォート・ワース国際空港で成田行き、アメリカンエアに搭乗してようやく肩の荷が下りました。ずっと緊張の連続でしたが、あと約13時間で日本に到着です。

この学会出席にはもう一つ重要な目的がありました。

古い友人である米国人医師に、ニューオーリンズでお会いする約束をしていました。エモリー大学留学当時、彼と私は同じボスのもとで机を並べて働き、一緒に遊びました。一緒にゴルフをプレイしたり、マスターズ・トーナメントを見学にもオーガスタまで出掛けました。それ以来25年以上に渡って、家族ぐるみで交流を深めてきました。

今回は、日程に余裕が無いためアトランタに立ち寄れない旨を伝えると、彼がニューオーリンズまで足を運んでくれました。彼は私と同じ心臓専門医ですが、その専門科目の基礎となる内科学会のFellowになることは大変意義深いものだと言い、私の家族に同伴してconvocation ceremonyに出席し、一緒に祝福してくれました。彼は某州立大学医学部の教授を務める一方で、自身のクリニックでも診療し、臨床試験を企画したくさんの論文を発表し、自らが設立した創薬ベンチャーの最高責任者も努めている多忙な人間ですが、期間中の2晩、私達家族と共に大切な時間を共有してくれました。既に米国FDAの認可を受け、他社を介して米国内への供給が決まっている薬品があり、さらに今後の展開も期待しているのだそうです。

律儀で物静かな人間ですが、医師としては大変聡明で、私は単に友人としてだけでなく、同じ臨床医としてディスカッションもできる医師でもありたいと考えてきました。留学当時はインターネットも電子メールもまだありませんでしたが、今や一台のPCから世界の様々な情報にアクセスできる時代となりました。

クリニックの診察室にこもったりせず世界につながりたいと考え続けてきたことが、今日のFellow昇格につながったのだと考えています。

ACP Japan Chapter について：

とてもユニークで魅力的な組織です。

黒川清先生、小林祥泰先生、上野文昭先生と引き継がれる中で、今日、米国外のchapterの中でもひとときわ発展が注目されています。医学生のうちから、経験豊富な諸先輩方と一緒に委員会を構成し、chapterの運営に関わり、米国内科学会に直に繋がることができる環境は夢のようです。

私にとってFACPの原点は、1991年に取得した認定内科専門医資格にあります。この認定書には日本内科学会理事長（当時）として黒川清先生の名前が記され、また本文は沖中重雄先生の書によるもので、色褪せてはきましたが、今でもとても大切にしているものです。



当時は、米国内科学会のことなど頭の片隅にもありませんでした。私の場合、その後のキャリアの中で少しずつ米国との繋がりができてきたのですが、今日、ACP Japan Chapterのような素晴らしい組織の構成員の一人であることを誇りに思い、これからも、このご縁を大切にしたいと思います。

今回、私を含めて日本から6名のFellowがconvocation ceremonyに出席しました。

慌ただしく帰国した後は、平常通り診療の現実に戻りましたが、自分がニューオーリンズに出かけ、convocation ceremonyに出席したことなど夢のまた夢のようにも思われ、こうして記憶をたどりレポートにまとめ、撮りためた写真を眺めることで、あれは現実であったと思い起こす日々になりました。

以上、2018年4月16日（木曜日）convocation ceremony出席について記憶がまだ鮮明なうちにレポートにまとめておきます。

ニューオーリンズは滞在中、ほとんど雲一つない素晴らしい青空でした。

雨女を連れて行っても、今回ばかりは晴れ男の私の方が勝ったということでしょうか？